

研究発表もうしこみフォーム

氏名：竹越孝・スチンバト

氏名のローマ字表記：Takashi TAKEKOSHI, Sechenbat

所属：神戸市外国語大学・内蒙古大学

専門分野：中国語学・モンゴル語学

発表のタイトル：『一百条』系諸本の継承と変容

発表要旨（600字～800字程度）：

清・智信の編、乾隆15〔1750〕年頃の刊行とされる満洲語の会話書『一百条』（Tanggū Meyen）は、満洲語によるテキストの所々に中国語の傍訳（逐語訳）が付される形式であったが、その後これに中国語の対訳文を加えた『清文指要』（乾隆54〔1789〕年）、モンゴル語と中国語の対訳とした富俊編『初学指南』（乾隆59〔1794〕年）、さらには満洲語・モンゴル語・中国語三言語の対訳とした富俊編『三合語録』（道光9〔1829〕年）といった具合に次々と改編されていったほか、満洲語とモンゴル語の対訳版やトド文字によるモンゴル語オイラト文語版も存在する。後にこの書は対訳部分の中国語が非常に口語的であることから北京語の教材として注目され、西洋近代における最初の本格的な中国語教科書であるトマス・ウェイド編『語言自邇集』（1867年）に収められることになった。『一百条』系諸本は、前近代の東アジア世界で最も広く流通した多言語教材と言えるものであろう。

我々はこのたび、これら『一百条』系諸本における満洲語6種、モンゴル語4種、中国語8種、英語訳2種、計20種のテキストを一文ごとの対照の形で示した『「一百条」系諸本総合対照テキスト』（全4巻、好文出版、2020-24年）を刊行した。本発表の目的は、我々が行ったこの対照作業を基礎として、『一百条』諸本がどのような継承関係にあり、互いのテキストがどの部分でどのように影響を与え合っているかを明らかにすることである。発表では、竹越が満洲語と中国語のテキスト、スチンバトがモンゴル語と満洲語のテキストを主に扱い、それぞれの言語の内部で、あるいは複数の言語が交差する中で、『一百条』系諸本がいかなる変容を遂げてきたかを総合的に探りたいと思う。